
 論 説

フェルナンデス・フローレスと 保守的ユートピア

渡 辺 千 晴

目次

はじめに

一 フェルナンデス・フローレスと『七つの柱』

二 近代的進歩とヨーロッパ化

三 迷走する理念の行方

四 近代社会における『七つの柱』

おわりに

はじめに

イギリスの人文主義者トマス・モア（Thomas More: 1478-1535）が描いた理性の共同体であるユートピアをめぐる長い間「理想」の社会が追求されてきた。だが、戦後において、ユートピアは戦間期における「ディストピア¹⁾」と結びつけられることが多く、それらは否定的なものとして批判される傾向にある。カール・ポパー（Karl Raimund Popper: 1902-1994）は、『開かれた社会とその敵』（1945）で、ユートピア主義が含んでいる重大な要素として、唯美主義（aestheticism）と徹底主義（radicalism）を挙げ、それらが「理性を放棄し、その代わりに政治的奇蹟に対する絶望的な希望

1) 元来、「ディストピア（Dystopia）」という言葉は、ジョン・スチュアート・ミル John Stuart Mill（1806-1873）によって、1868年にイギリスの庶民院で行なわれていた議論の中で、初めてユートピア（Utopia）に対する反意語として使われた。だが、19世紀後半から「ユートピア」小説が流行していたのに対し、20世紀の始めから「ディストピア」小説と呼ばれるものが流行し出したため、それらとの対比によって、現代においては、「ディストピア」の「反ユートピア」としての側面が強くなっている。

を置き換えることへとわれわれを導かざるをえない²⁾」ものであるとし、ユートピア主義が最終的に暴力的方策に進みかねないことを危惧している。また、その5年後に出版されたマリー・ルイズ・ベルネリ (Marie-Louise Berneri: 1918 -1949) の『ユートピアの思想史』(1950) では、過去のユートピア思想における歴史的発展について詳細に分析されており、ほとんどのユートピア思想には権威主義的な要素が含まれているとした³⁾。確かに彼らの主張からも明らかな通り、ユートピアにおける普遍的正しさとそれによる自由への縛りという側面は問題視され、それらの否定的な側面がこれまで前面に押し出されてきた。

そして未だに「ユートピア」は、かつての戦間期に出現した全体主義ないし「ディストピア」に繋がりがねないものであるとして、危惧される傾向にある。だが、このようにユートピアが戦間期における抑圧的な国家ないし社会として過度に強調されることによって、この一つの政治思想が予め宿していた多面的な特徴が見過ごされてしまい、ユートピアの実像を真に特定することは困難となる。ヴィヴィアン・グリーン (Vivien Greene) は、「特に共産主義が崩壊した後の時代になると、20世紀の知識人達によって、ユートピア的な願望は全体主義的なイデオロギーやソ連や中国の体制と結び付けられることが多かったため、本当にユートピアが存在するのかどうか、存続できるものなのかについては、議論の難しい問題となっている⁴⁾」と述べている。

よって、本来のユートピアがどのような存在であるのかを追求していくためには、上記のようにユートピアそれ自身を過度に抑圧的な政治体制であるとして、一面的に理解するのではなく、それ以外のコンテキストから把握することもまた重要なのではないだろうか。

これまでの政治体制ではなく、ユートピア作品に焦点を当てることによって、本来のユートピアとは何かについて探求した研究は、ルイス・マンフォード (Lewis Mumford: 1895-1990)⁵⁾、ヘルマン・ノースロップ・フラ

2) Karl R. Popper. 1947. *The Open Society and Its Enemies Vol I*. London: George Routledge & Sons, Ltd., p. 147; 内田詔夫・小河原誠訳『開かれた社会とその敵 (上)』未來社、1980年、166頁。

3) Marie-Louise Berneri. 1951. *Journey Through Utopia*. Boston: The Beacon Press. (手塚宏一・広河隆一訳『ユートピアの思想史』太平出版社、1972年。)

4) Vivien Greene. 2011. *Utopia/Dystopia*. *American Art* 25 (2), pp. 2-7, p. 2.

5) Lewis Mumford. 1922. *The Story of Utopia*. New York: Boni and Liveright, Inc. (関

イ（Herman Northrop Frye: 1912-1991）⁶⁾、J.C. デーヴィス（J. C. Davis: 1940-2021）⁷⁾ 等によって、これまで社会学、文学や歴史学といった領域で数多くなされてきた。そのため、それらの作品で「ユートピア」として描かれている内容の分析が行なわれている研究は、数多く存在する。ただ、未だにそれらが描写されるに至ったコンテクストについて、政治思想の領域から詳しく論じられている研究は少ない。

そこで本論文は、その当時の政治的議論における一般的な慣習とそこから導き出されるその作品執筆時にその作者が抱えていた問題意識、その作品の著者が持っていた精神世界といった思想的コンテクストを再現することによって、その作品の意義を見出す手法であるコンテクスト中心主義的アプローチに則り⁸⁾、戦間期における一つのユートピアについて検討したい。戦間期はまさにユートピアがディストピアとして見做され始めた転換期⁹⁾であり、この時代を通してユートピアにおける否定的側面が浮き彫りにされ、ユートピア全体が否定的表象として認識されるに至ってしまった。これに対して本稿は、この時期におけるユートピアを再び検討し直すことによって、ユートピアの持つ多面性を提示したい。これまでユートピアは、ポパーやベルネリによって言及されたように、自由に対する束縛といった一側面によって批判されてきた。しかし、ユートピアとは本来、過剰な自由による無秩序に対し、秩序を呼び覚ますものである。その時代における過剰な自由に対する懸念から、それに対するかつての普遍的規範を回復しようとしたのが、本稿で取り上げる「保守的ユートピア」である。

本稿では、戦間期における保守的ユートピアを提示した作品の一つであ

裕三郎訳『ユートピアの系譜——理想の都市とは何か』新泉社、1971年。）

6) Herman Northrop Frye. 1965. *Varieties of Literary Utopias*. In *Utopias and Utopian Thought*, edited by Frank E. Manuel, pp. 25-49. Boston: Beacon Press.

7) J.C. Davis. 1981. *Utopia and the Ideal Society: A Study of English Utopian Writing*. Cambridge: Cambridge University Press.

8) コンテクスト中心主義的アプローチを代表する人物であるクエンティン・スキナーは、“*The Foundations of Modern Political Thought*” (1978) の中でモアの『ユートピア』を分析する際に、テキスト分析の方ではなく、それが描かれるまでのコンテクストの方にかなりの比重をかけながら、『ユートピア』の作品意義について言及している。(cf. Quentin Skinner. 1978. *The Foundations of Modern Political Thought v.1*. Cambridge: Cambridge University Press.)

9) 「20世紀の頃は毎年、肯定的な「ユートピア」が世に出されていたが、第1次世界大戦から21世紀の初めまで、最も頻繁に出版されたユートピア文学の形態は「ディストピア」であった。」(Maryanne C. Horowitz. 2005. *New Dictionary of the History of Ideas Vol 6*. New York: Charles Scribner's Sons, p. 2406.)

る、フェルナンデス・フローレスの『七つの柱』(1926)について考察する。詳しくは第一節で検討するが、彼の内戦中の政治的立場の問題もあり、これまで彼に関わる人物研究や彼の作品はユートピアないしディストピアの系譜に位置づけられて論じられることは、あまりなかった¹⁰⁾。しかし、彼が戦間期において幅広く保守の論者として活躍していたことは事実である。したがって、本稿では彼を戦間期における「保守的ユートピア」を代表する論者として取り上げることで、彼という人物に対して、再評価の機会を提示したい。

また、「保守的ユートピア」は、これまでの戦間期におけるユートピアないしディストピアの研究において、アーサー・ケストラー (Arthur Koestler: 1905-1983) の『真昼の暗黒¹¹⁾』(1940) やジョージ・オーウェル (George Orwell: 1903-1950) の『一九八四年¹²⁾』(1949) といった、イデオロギー的には左派と位置づけられている人びとの作品が主に注目され、言及されることが多かったため¹³⁾、このような右派側のユートピア像に関する考察は現代においても充分になされているとは言えない。このことも踏まえたうえで、本稿では今まで多く語られてこなかった一つの「保守的ユートピア」が描かれるに到った経緯を辿ることで、そのようなユートピアに対する見直しと戦間期におけるユートピアの問題を考察するうえでの新し

10) 2019年に *Letras Libres* の記事で、スペインでの過去の芸術作品に対するポリティカル・コレクトネスの問題を取扱う際に、フェルナンデス・フローレスの『七つの柱』がスペインのディストピア作品として取り上げられた。当記事は、『七つの柱』を20世紀におけるディストピア作品の系譜上に位置づけ、同書は「どのような未来における社会的ユートピアも、伝統主義的な専制主義も、ポリティカル・コレクトネスによって未来をピューリタンの熱狂へと導きかねない」ことを提示した作品であるとして紹介した。(Luis Prados, Wenceslao Fernández Flórez: *Un Mundo Sin Pecados Capiales*, *Letras Libres*, 23 Septiembre, 2019. Available at: <https://www.letraslibres.com/espana-mexico/cultura/wenceslao-fernandez-florez-un-mundo-sin-pecados-capiales>. 最終アクセス: 2022年2月23日)

11) アーサー・ケストラー著、岡本成蹊訳『真昼の暗黒』筑摩書房、1950年。

12) George Orwell. 2009. 1984. In *Modern Classics the Complete Novels of George Orwell (Penguin Modern Classics)*, pp. 979-1175. Penguin Books (高橋和久訳『一九八四年』早川書房、2019年。)

13) 戦間期におけるユートピアは、戦後において、特に社会主義や共産主義と結びつけられて語られることが多かったため、現代においても未だに当時の社会主義または共産主義運動は当時のユートピアないしディストピア作品と共に語られることが多い。(cf. Charles J. Erasmus. 1977. *In Search of the Common Good Utopian Experiments Past and Future*. New York: The Free Press, A Division of Macmillan Publishing Co., Inc; Patricia Vieira & Michael Marder. 2012. *Existential Utopia: New Perspectives on Utopian Thought*. New York: Continuum.)

い視座を提供することを目的としている。

本稿の構成は、以下の通りである。一では、フェルナンデス・フローレスという人物とその作品について述べる。二では、スペインにおけるヨーロッパ化の問題とそれによる政治的分裂について検討し、三で、その後の模範の欠如と必要性をめぐる議論について言及する。これらのコンテクストを踏まえ、四ではフェルナンデス・フローレスの『七つの柱』を分析する。最後には「保守的ユートピア」とユートピアの系譜における当書の位置づけについて考察し、結論を述べる。

一 フェルナンデス・フローレスと『七つの柱』

まずは、フェルナンデス・フローレスという人物とその作品について述べる。フェルナンデス・フローレス（Wenceslao Fernández Flórez; 1885-1964）は、ガリシア出身のジャーナリストである。彼は若くして地元の新聞社に就職したが、1915年頃にマドリードの新聞社へ転職し、そこで政治ジャーナリストとして活躍する。彼は、政治に対してユーモア溢れる批判を行なうことで知られていた。彼は、1917年に“*Volvoreta*¹⁴⁾”（1917）を出版し、この作品によって作家として注目を集めることとなる。その後、“*El Secreto de Barba Azul*¹⁵⁾”（1923）や“*El Malvado Carabel*¹⁶⁾”（1931）などの社会風刺に根ざした傑作を発表したため、彼は戦間期スペインにおける人気作家となる。しかし、スペイン内戦が終結した頃には、彼はもはや、かつてのような政治的ユーモア作家ではなかった。フェルナンド・ディアス・プラハ Fernando Díaz-Plaja は、「フランコの勝利によって、我らの作家における大胆且つ皮肉な路線は崩れ、彼は政治家、資本家、聖職者、軍人に対するユーモラスな攻撃を断念し、代わりにサッカー選手、闘牛士、街中でシステムについて当たり障りのない分析を行なう無意味な人間へと、攻撃を移さざるを得なかった¹⁷⁾」と述べている。よって、ホセ・ルイス・カ

14) Wenceslao Fernández Flórez. 1954. *Volvoreta*. In *Obras Completas Tomo I*, pp. 149-318. Madrid: AGUILAR.

15) Wenceslao Fernández Flórez. 1940. *El Secreto de Barba Azul*. In *Las Novelas Del Espino En Flor*, pp. 17-244. Madrid: Ediciones Españolas.

16) Wenceslao Fernández Flórez. 1954. *El Malvado Carabel*. In *Obras Completas Tomo II*, pp. 803-979. Madrid: AGUILAR.

17) Fernando Díaz-Plaja. 1998. *Wenceslao Fernández-Flórez: el Conservador Subversivo*.

ストロ・デ・パス José Luis Castro de Paz、ヘクトール・パス・オテロ Héctor Paz Otero、フェルナンド・ゴメス・ベセイロ Fernando Gómez Beceiro は、「フェルナンデス・フローレスは結局、人生を前にして、自己の立場におけるどのような確固とした素案も、根本から否定してしまう世界という流動的のヴィジョンから——当時、彼は自らを「異端の社会主義者」と定義していた——逃れられない人物であった¹⁸⁾」と評している。

また、彼はスペイン内戦の際に、共産主義者たちによる迫害を恐れ、オランダへ亡命した後、古くからの友人であるフランコ将軍の政治活動に参加していた。アルベルト・ペーナ・ロドリゲス (Alberto Pena Rodríguez) は、フェルナンデス・フローレスを、フランコ主義を正当化していたスペイン知識人の1人であったとし、彼は「共和政府による大虐殺」から生還した知識人として、ポルトガルの報道機関で敬われながら、ポルトガルでのプロパガンダ活動を行っていたと論じている¹⁹⁾。また、フリオ・プラダ・ロドリゲス Julio Prada Rodríguez は、「彼の保守的かつ反マルクス主義的イデオロギーと、フランコ一家とフェルナンデス一家の古くからの友好関係により、彼は亡くなるまで、政権と国家的カトリシズム側の人物として、周囲からある種の不信感をもたれていた²⁰⁾」と述べている。これらのことから、フェルナンデス・フローレスは、一般的に右翼的作家として位置づけられている。

しかし、その一方で、スペイン内戦前までの彼が、戦争や資本家に対する批判の記事を数多く執筆し、それらを批判する内容のエッセイや小説を出版していたことも事実である。確かに内戦を通して彼のユーモア作家と

La Coruña: Fundación Pedro Barrié de la Maza, Conde de Fenosa, p. 63.

18) José Luis Castro de Paz, Héctor Paz Otero, Fernando Gómez Beceiro. 2015. "El Malvado Carabel": impronta de Wenceslao Fernández Flórez en el cine antes y después de la Guerra Civil. *Revista De La Asociación Española De Semiótica* 24, pp. 241–257, p. 244.

19) Alberto Pena Rodríguez. 2019. Lecturas de propaganda antirrepublicana en Portugal durante la Guerra Civil española. *Lectura y lectores: (2ª parte)*, pp. 71–85.

20) Julio Prada Rodríguez. 2017. «Ecos del tiempo»; Algunos referentes históricos en la obra de Wenceslao Fernández Flórez (A Coruña, 11 de febrero de 1885 — Madrid, 29 de abril de 1964). In *Actas Do Congreso Internacional O Home Que Quixo Crear: Literatura, Xornalismo E Cinema Na Obra De Wenceslao Fernández Flórez = El Hombre Que Quiso Crear : Literatura, Periodismo Y Cine En La Obra De Wenceslao Fernández Flórez*, edited by Natalia Alonso Ramos, Xosé María Dobarro Paz, Fernando Gómez Beceiro, pp. 25–46. A Coruña : Vía Láctea Editorial, p. 43.

しての政治的姿勢は大きく変わってしまったが、それ以前に彼が残した偉大な功績を見過ごすわけにはいかない。彼は、1926年に『七つの柱』（“*Las Siete Columnas*”）という小説を出版する。この作品は同年にスペイン国民文学賞（el Premio Nacional de Literatura）を受賞した。本作品の題名である「七つの柱」とは、キリスト教における七つの罪（驕慢、貪欲、嫉妬、忿怒、飽食、淫楽、懶惰）のことである。

本作品は、次のような内容となっている。ある時、一人の隠者がサタンに、世界からこれらの罪を消し去るようにと願う。そして、地球上から罪源は失せ、「無罪」のユートピア²¹⁾が訪れる。これにより、世界は平和となり、これまで人びとを戦争に駆りたててきた偶像を破壊する「つぐないの石屋」という集団までもが結成される。軍隊は無くなり、警察制度が廃止される。そして、「食べること」は生理的なものと見なされ、かつての男女共同の「レストラン」は、男女別々の「栄養素補給所」となる。やがて、銀行は倒産し、産業は衰退し、失業者が増加していく。そして、出生率が低下し、多くの人びとは乞食となる。

このような「ユートピア」を描いた『七つの柱』は、宗教的「罪源」が、人間社会にとって必要な活力であり、これらは拒まれるものではなく、受け入れられるべきだとする教訓を提示する作品として、解釈されることが「一般的」である。例えば、1997年版『七つの柱』の日本語訳をおこなった牛島信明は、「人の世はおぞましい罪悪に満ちている。しかし、そうした罪悪がなければなおさら悲惨になるという考え、つまり、この世の、人生の根源的矛盾の認識である²²⁾」と同書で解説している。このように人間の社会において罪悪は必要不可欠なものであるといった一般的解釈をめぐる問題については後で述べるが、ここで重要なのは、戦間期に中世のカトリック修道士たちの理想であった「無欲」のユートピアが描かれたことである。このようなユートピアがなぜ戦間期において現われざるをえなかったのか、その経緯を次節で説明する。

21) 小学館が1997年に出版した翻訳本では、本作品における後篇の第一、二、三章が割愛されており、「無欲」のユートピア描写が数多く削られている。

22) 牛島信明訳『七つの柱』小学館、1997年、271頁。

二 近代的進歩とヨーロッパ化

『七つの柱』で描かれたようなユートピアが戦間期に現れた理由を解明するにあたり、まずは当時における「ヨーロッパ化」の問題を、その重要な背景として考える必要がある。19世紀後半から大々的に始まる「ヨーロッパの模倣」を理想とした「ヨーロッパ化」の動きによって、非ヨーロッパ諸国は資本主義、中央集権化、工業化、都市化、合理主義を促進させていった。そして、これらの国々は外面的な文明化に成功し、国内のインフラ整備や生産活動の効率化などの面で妙々たる発展を遂げた。

西ヨーロッパに位置するスペインは、地理的にはイベリア半島に属し、数世紀に渡ってイスラーム王朝の支配下にあったという背景も伴って、他の西欧諸国からは孤立した一面を持っていた。また、かつての大帝国としての矜持に固執した伝統主義者たちの反発も小さくなかったため、「ヨーロッパ化」が著しく遅れていた。よって、19世紀後半に入ると、スペインもまた、他の非ヨーロッパ諸国と同様に近代化を余儀なくされる。だが、そのために、かつての正統的規範であった「宗教」が示してきた「美德」という「模範性」は徐々に失われていく。フェルナンデス・フローレスは、そのような無信仰が漂う社会に対して、かつての宗教的教義に基づいた「ユートピア」を掲げるのである。本稿では、このような当時のスペインにおける「ヨーロッパ化」の問題を踏まえながら、フェルナンデス・フローレスの「ユートピア」について考察していく。

かつての「太陽の沈まぬ国」は、17世紀を迎えると三十年戦争やフランス・スペイン戦争などを通じて、衰退の兆候を見せ始めていた。そして、啓蒙思想が国内に流入すると、「過去を批判し、宗教信仰と政治的価値を結びつけることを否定し、ヨーロッパの流れをスペインへ導入しようとする」啓蒙主義者と、「歴史をさかのぼってスペインの国民性をとり戻し、スペインの未来にとって唯一の可能性は、この国民性を再認識することにある」とする伝統主義者といった二つの勢力が出現する²³⁾。この対立構図は、19世紀に入ってもなお、自由主義者と伝統主義者の敵対として継続していく。19世紀後半に差し掛かると、スペインは立憲君主制を立ち上げ、

23) J. ソペーニャ『スペイン——フランコの前四〇年』講談社、1977年、13頁。

イギリスの二大政党制を取り入れる。だが、この時も依然として自由主義者と伝統主義者との対立は続いていた。スペインの歴史学者ラモン・メネンデス・ピダル（Ramón Menéndez Pidal: 1869-1968）は、当時の政治をめぐる二つのイデオロギー対立について、以下のように述べている。

二年、四年、六年というぐあいに短期間、対立する双方のどちらかが政権を取ったが、それ以上続くことはめったになかった。ただ一般的に言って、右翼の方が、より断固として結束も堅かったから、右翼が政権の座にあった期間の方が長かったが、しかしつねにたがいに対する非妥協的態度が、国という船を、何ら確かな針路もなしに、左舷かと思えば右舷というぐあいに激しく横揺れさせていった²⁴⁾。

上記のような対立を背景として、この頃のスペインは、幾度も軍人達によるクーデターや王政をめぐる革新を経験することとなる。スペイン第二共和政府の元大統領マヌエル・アサーニャ・ディアス（Manuel Azaña Díaz: 1880-1940）は、『ベニカルロの夜会』（1939）で、以下のように述べている。

スペイン社会は、もう一〇〇年以上も前からしっかりとした地歩、しっかりとした基礎を得ようとしているのです。しかし、まだそれを得ていないのです。どうやってそれを築くのかわかっていないのです。この不安定な状態の政治での表れは、わが一九世紀の幾多のクーデタ、反乱宣言、独裁政治、内戦、王政崩壊、王政復活に見られるのです。²⁵⁾

19世紀後半のスペインにおいて、自由主義と伝統主義との対立は大きな問題であった。したがって、1885年にアルフォンソ12世が他界する際、保守党の政治家カノバスは諸党派の平和的政権交代を制度化するため、自由党のサガスタと協定を結び、息子のアルフォンソ13世が成人するまで

24) Ramón Menéndez Pidal. 1971. *Los Españoles en la Historia*. Madrid: Colección Austral, p. 215; 佐々木孝訳『スペイン精神史序説』法政大学出版局、1974年、175頁。

25) マニユエル・アサーニャ著、深澤安博訳『ベニカルロの夜会——スペインの戦争についての対話』法政大学出版局、2019年、69-70頁。

の間、輪番制に則って政権交代を行うことを決定する²⁶⁾。この協定の背景には、国内での自由主義勢力と伝統主義勢力双方の対立を沈静化させようとする思惑があった。だが、このような輪番制によって、この両者のわだかまりが解消されることはなく、益々政局は不安定なものとなっていく。このような不安定な政局のために、後の1923年にプリモ・デ・リベラ將軍による独裁政権が敷かれることとなるのであった。

また、この頃は多くの知識人たちによって、スペインにおける「ヨーロッパ化」の必要性が唱えられていた。スペインの作家ピオ・バローハ（Pío Baroja y Nessi: 1872-1956）は、『知恵の木』（1911）で当時のスペインを以下のように描写している。

スペインでは、ヨーロッパ文化の影響は非常に限られ、技術分野に偏っていた……スペイン全体、特にマドリドはばかげた楽天主義に包まれていて、スペイン的なものなら何もかもが最高だった……貧しく孤立する国にありがちな、嘘と錯覚にすぎる傾向が、思想を滞らせ時代遅れにしていた。²⁷⁾

当時のスペインは文化においても、経済においても孤立的であった。そのような状況の中で、「ヨーロッパ化」を唱える人びとが現れた。その代表的人物がミゲル・デ・ウナムーノ（Miguel de Unamuno y Jugo: 1864-1936）とアンヘル・ガニベ（Ángel Ganivet García: 1865-1898）である。

まず、ウナムーノの議論を見てみよう。彼は、「ヨーロッパ化」の必要性を唱え、『生粋主義をめぐって』（1895）において、ヨーロッパ化に反対していた当時の伝統主義者たちの他国の文明に対する排外的思潮であった「生粋主義」を批判した。だが、その一方で、彼は「民族」意識というものをも重視していた。彼は同書で、「民族というものは文明の産物であり、祖国への感情が歴史的経過の産物であること、そしてそうした祖国への感情は、世界主義の感情と共に強化され、活気づけられるもの²⁸⁾」であるとし、

26) cf. J. ソペーニャ『スペイン——フランコの四〇年』講談社、1977年。関哲行・中塚次郎・立石博高編『世界歴史大系スペイン史（2）近現代・地域からの視座』山川出版社、2008年。

27) ピオ・バローハ著、前田明美訳『知恵の木』水声社、2009年、18頁。

28) Miguel de Unamuno. 1995. *Obras completas, Tomo VIII*. Madrid: Turner: Fundación

これまで他の文化から孤立し、過去の栄光という幻想の中で眠っていたスペイン精神を再び目覚めさせるためには、ヨーロッパ文化を取り入れることが必要であると説いている。彼は以下のように語っている。

スペインの精神的悲惨はその孤立に、すなわち生粋の宗教改革をその発生期に圧殺し、ヨーロッパ的宗教改革の侵入を阻止したところの異端審問的保護主義に集約されるあらゆる行為がわれわれに押しつけた孤立、に由来するのである。……われわれがこうした精神的荒廃に生氣を与えることができるのは、ただヨーロッパの風に対して窓を開け放ち、自らを大陸の状況に埋没させることによって、そしてそうすることによっても自分たちの人格を失うことにはならないのだという信念を持ち、スペインを築き上げるために自身をヨーロッパ化し、自らを民族の中に浸すことによつてのみ初めて可能である²⁹⁾。

以上のように、ウナムーノは、かつての宗教改革の時代からスペインに「血統の排他的個別化³⁰⁾」をもたらしてきた異端審問的姿勢が、他の国々からの孤立を招いているとした。とはいえ、ウナムーノの提唱したヨーロッパ化の狙いは、あくまで民族意識の覚醒であったことは強調しておかなければならない。

次に、ウナムーノと同じくガニベーもまた、ヨーロッパ化の必要性を『スペインの理念』（1897）にて説いている。しかし、彼の見解は、より慎重である。彼は近代的進歩について、以下のように語っている。

近代的進歩はすべて不確かなものである。それは理念に基礎をおかず、動産のための不動産の破壊の上になり立っているからだ。この資産はただ生活の必要に応ずるために役立つものではなく、正義に支配され

José Antonio de Castro, p. 93; 神吉敬三、アンセルモ・マタイス、ヨハネ・マシア、佐々木孝編訳『ウナムーノ著作集1 スペインの本質 小論集』法政大学出版局、1972年、36頁。

29) *Ibid.*, pp. 198-199; 同上 150頁。

30) *Ibid.*, p. 193; 同上 144頁。

るかわりに術策に支配され、メディアやペルシア人の野蛮な帝国が亡びたように、跡も残さず亡びるに違いないのである。³¹⁾

ガニベールは、近代における進歩が理念に基づいておらず、常により多くの利益を求めるあまり、不動産を動産へ、つまり安定した固定的な資産を不安定な流動的なものへと変えてしまうものであるとしている。また、彼は近代戦における人間同士の「遠距離」問題について、次のように述べている。

……近代戦は殺す人びとを遠距離に置くゆえにより上品に見えるが、慈悲心の現われを妨げるがゆえにまさに利己的で野蛮な戦争である。離れて戦うものは、殺せさえすればいつも人を殺すが、白兵戦では殺すこともあり、また同情して許すこともある。スペイン人はきびしい残酷な戦士だと見なされているが、おそらく慈悲心と寛容の例をもっとも示したのもであらう。それは彼らが他国の人びとより寛容で情け深いからではなく、常に敵のごく近くで戦って来たからである。³²⁾

ガニベールはこのように、「近代」に対して批判的ではあるが、外面的な進歩の必要性も説いてはいる。しかし、そのような近代化を迎える際には、外国の模倣によって、近代的国民へと変貌し、「価値あるもの」まで変形させるのではなく、あくまでも国家観念の枠に合致するもののみに限らねばならないとした。

しかし、ガニベールやウナムーノのように、ヨーロッパ化を必要であると提唱しながらも、かつての伝統を重んじる姿勢は、当時のスペインにおいては少数派であった。メネンデス・ピダルは、「ガニベール、そしてウナムーノの主張にもかかわらず、左翼の者たちは歴史的伝統の中に、自分たちのイデオロギーと合致する諸様相を研究したり肯定したりすることにはほとんど関心を示さないというのがつねであった³³⁾」と述べている。

31) Ángel Ganivet. 1897. *Idearium Español*. Granada: Tip. Lit. Vda. e Hijos de Sabatel, p. 48; ガニベール「スペインの理念」メネンデス・ピダル、ガニベール、ライン・エン・トラルゴ著、橋本一郎・西澤龍生訳『スペインの理念』新泉社、1991年、130頁。

32) *Ibid.*, pp. 48-49; 同上 131頁。

33) Ramón Menéndez Pidal. 1971. *Los Españoles en la Historia*. Madrid: Colección

1898年にスペインは米西戦争を迎え、アメリカに敗北し、キューバ、プエルトリコ、フィリピンを失う。これにより、スペインのヨーロッパ化への必要性がより切実なものとなる。そして、ガニベーの言葉でいう理念を基礎に置かない近代的進歩の影響が、徐々に強くなっていき、彼が「大いに利己的で野蛮な戦争」と評した近代戦が、1914年に入り、大々的に行なわれることで、スペインにさらなる混沌がもたらされるのである。そして、このような混沌状態と、伝統的理念の喪失による「模範性」の欠如が、後の知識人たちによって、重要な社会「問題」として提起され、フェルナンデス・フローレスが『七つの柱』執筆に到る環境を形成していくのである。

三 迷走する理念の行方

前節で大きな問題として議論された「ヨーロッパ化」によって、ガニベーが懸念していたように、スペイン社会における模範の喪失といった新たな問題が戦間期において重要な議論となってくる。1914年に第一次世界大戦を迎えると、スペインは中立国の立場をとらざるを得なかった。この時期においても、国内の世論が大きく二つに分かれていたからである。斉藤孝はその背景について、「国王や貴族・地主・教会・軍部は概してドイツに好意的であったが、イギリス―フランス資本の影響の強い産業資本家は当然イギリス―フランスに好意的であった³⁴⁾」と述べている。スペインの作家ビセンテ・ブラスコ・イバーニェス（Vicente Blasco Ibáñez: 1867-1928）は、『われらの海』（1918）で、当時の二つに分裂した大衆を次のように描写している。

……海員は、目前に相搏つ二大群衆の間に、甚しい差異を認めた。一方はその幻想を過去に置き、力の統治権と戦争の神性を若返らせて、これを現代の生活に適用しようとしていた。もう一方の群衆は、自由

Austral, p. 220; 佐々木孝訳『スペイン精神史序説』法政大学出版局、1974年、179頁。
34) 斉藤孝『スペイン戦争』中央公論社、1989年、29頁。

な民主政治と、平和で寛容で嫉妬を知らない国家ばかりの世界とを夢見て、未来をうち建てようとしていた³⁵⁾。

第一次大戦によって、国内が二つの勢力に分断されていたなか、政治家たちはその機会を貪欲に利用していた。フェルナンデス・フローレスが1930年に出版した『我ら大戦にいかざりしもの』(“*Los que no fuimos a la guerra*”)では、第一次大戦の最中、スペインの政治家たちが、中立の立場を利用した大規模な商いを行なっていたとして、次のように語っている。

政治家は、イギリスなり、フランスなり、ドイツなりの政府に恩恵を希ひ、位置を支へるためや上へ昇るために、その支持を求めてゐた。自分達の妥協に、盡力に、忍容に、時には墮落にまで、値段をつけてゐた。輸出許可を按配しては、商賣をしてゐた。工業家も、船主も、荷主も、めきくと、嘘のやうに早く、金を作つた。各國の大使館は、大まかな値段表によつて、雄辯家、新聞記者、煽動家、間諜、口の穢い三文文士を、片つぱしから買収した……唯、遠いく地に、死人の山が作られてゐたのだ。³⁶⁾

同書で彼は、政府が戦争を利用し、より多くの利益を得ようと慢心する一方で、戦場では多くの人びとが命を落していたことを強調して描いている。そして彼は、第一次世界大戦によって、数多くの犠牲者が出たことに対して、当時誰もが人を人間 (*el hombre*) として見てはおらず、あくまでも総合人類 (*la Humanidad*) の一分子として捉えていたとし、「総合人類は苦しまない。人間は苦しむ。集合的な苦痛といふものが、どこにも存在しないのだ……あゝいふことが起つたのは、人間といふものを、なんびとも考へようとしなかつたため、または、考へることが出来なかつたためだ³⁷⁾」と述べている。このような状況の中、第一次世界大戦時に中立の立

35) プラスコ・イバーニェス著、永田寛定訳『われらの海下巻』岩波書店、1999年、298頁。

36) Wenceslao Fernández Flórez. 1954. *Obras Completas Tomo II*. Madrid: AGUILAR, p. 100; フェルナンデス・フローレス「われら大戦に行かざりしもの」永田寛定訳『世界ユーモア全集第八巻 南歐篇』改造社、1932年、156頁。

37) *Ibid.*, pp. 100-101; 同上 157頁。

場を貫いたスペインは、交戦国の需要に応え、鉄鋼や石炭の輸出量を伸ばしたことで、一時的に好景気を迎えた。だが、その一方で、貧富の格差が徐々に広がっていった。また、生活必需品における国民の消費分も輸出してしまっただけで、物価が急激に上昇し、益々労働者階級の生活を困窮させた³⁸⁾。よって、1917年のロシア革命を境に労働者運動は激化し、スペインの地方自治運動もこの頃に活発化し始めていた。

フェルナンデス・フローレスは、“*Ricos y Pobres*” (1918) というエッセイの中で、第一次世界大戦前、つまり「数年前までスペインには、お金持ちは存在しなかった³⁹⁾」と述べ、大戦後の混沌とした社会状況について、以下のように語っている。

資本家は自分のお金を銀行に閉じ込め、そこから5%搾取するようになり、資本を持たない者は従業員になろうと努め、国民は生きることでだけで満足し、すべてをやり過ごし、政治上の茶番劇や大企業の不正行為、国家機能の完全な不調和を許している....⁴⁰⁾

フェルナンデス・フローレスは、第一次世界大戦を境に、人びとの生活が大きく変化したと見ていた。1921年4月の記事で、彼は第一次大戦後における人びとの消費傾向について次のように記している。

かつて経営者達は日雇い労働者一人一人から、特別な慈悲として、至高の寛大さによって、毎日1ペセタ⁴¹⁾借金していた。一体、何のために彼らはペセタを求めたのだろうか？ 実際、必要なかったのだ。消費もせず、タバコも吸わず、ボロボロの服を着て、ペセタはかつて贅沢なものであった。多くの場合、この日々のペセタは恐ろしい悩みをもたらすものであった。そして、それを取り去るために、彼らは租税を作ってくれと懇願するまでに至ったのだ。しかし、戦争で得た利益や、

38) cf. 齊藤孝『スペイン戦争』中央公論社、1989年。関哲行・中塚次郎・立石博高編『世界歴史大系スペイン史(2) 近現代・地域からの視座』山川出版社、2008年。

39) Wenceslao Fernández Flórez. 1954. *Ricos y Pobres*. In *Obras Completas Tomo I*, pp. 651-672. Madrid: AGUILAR, p. 651.

40) *Ibid.*, p. 654.

41) ペセタとは、ユーロ導入前のスペイン通貨を指す。

最近になって起こった社会習慣の急激な進化により、ペセタは4ペセタ、5ペセタ、6ペセタと変わっていった。そして、郊外の労働者達は野菜や肉に飛びつくようになった。消費することに屈したのだ。もっと言うと、ペセタが無いほうが、快適に過ごしていけることがわかってきたからこそ、彼らは消費することの悪徳と、そのような浪費を誘うただの悪質な模倣心に陥ってしまったのだ。⁴²⁾

以上のことから、第一次大戦後の好景気によって、消費文化がスペインに浸透していったことがわかる。だが、上記の引用箇所「悪徳」という用語を用いているように、フェルナンデス・フローレスはこの傾向を好意的に見てはいなかった。

同年の1921年、モロッコ戦争にてスペインは敗北を喫する。それ以来、国民の軍部と国王に対する反発は増していった。これまでの政府に対する懸念、経済的格差の問題、戦争での敗北は、スペイン社会を益々不安定なものにした。このような時期に、ホセ・オルテガ（José Ortega y Gasset: 1883-1955）は、『無脊椎のスペイン』（1921）を出版した。当書で彼は、社会を「一つの模範とそれに従順な人びとが形作る動的な精神的統一体⁴³⁾」として定義づけ、次のように語っている。

一つの国家が何世紀もの間ひどい衰弱を続けている場合、つねにその原因は、その国に模範的人物がいないか、あるいは大衆が不従順かのどちらかである。……もし今日われわれがスペインの現実に目を向けるなら、われわれはそこに不従順に満ち、模範性をひどく欠いた恐るべき光景を容易に見いだすであろう。価値評価を行なう本能が悲劇的なほど妙に倒錯しているため、数世紀前からスペイン国民はすべての模範的人物を嫌悪するか、少なくともその秀でた資質には盲目なのだ。⁴⁴⁾

彼によると、一つの国の衰退は、社会的共存の原理である「模範性—従順」メカニズムの機能不全から生じるものである。そして、ここで言及さ

42) Wenceslao Fernández Flórez. "Acotaciones de un oyente". 8 Abril. 1921. ABC. p. 9.

43) オルテガ著、桑名一博訳『オルテガ著作集2』白水社、1998年、332頁。

44) 同上 333-334頁。

れている「模範性」の欠如によって、この後スペイン社会は、より強固な政治的基盤を要求するのであった。

1923年に入り、度重なる経済・社会問題に対処できない政府に対して、プリモ・デ・リベラ将軍は、大地主、産業資本家、軍部の支援を得て、プロヌシミアメント⁴⁵⁾を起こす。そして、国王の承認の下で独裁政権を樹立させるのであった。しかし大多数の人びとは、独裁体制が成立したばかりの頃には、独裁への不快感をあらわにしないばかりか、体制を是認さえしていた⁴⁶⁾。かつての伝統主義勢力と自由主義勢力といった二大勢力に分裂していた二大政党制から、それらの勢力を一つに束ねようとする独裁政権の樹立によって、人びとはかつての不安定な政治体制と社会的混沌状態が、迅速に收拾されることを期待していたのであった。ファン・ソペーニャ Juan Sopena は、「一九二三年のスペインにしかれた独裁制は、まさに王制をたて直しつつ、諸政治党派に左右されずに、スペインの共存を固めるためのものであった⁴⁷⁾」と述べている。そして、フェルナンデス・フローレスはこのプロヌシミアメントについて、以下の記事を書いている。

現在の状況は、潜在的には…力による状況である。……懲らしめの最も重要な条件である「模範性」が欠けていた。刀は抜かれたが、親切な裁量によって、切られなかった。しかし、頭よりもっと面白いものを、つまり、根深い不正行為、罪深い共犯関係、有害な陰謀を断ち切る必要がある。……問題は、実際に国全体を道徳的に再構築することである。⁴⁸⁾

45) スペインの歴史家マダリアーガは、『情熱の構造——イギリス人、フランス人、スペイン人』（1928）の中で、「スペインの革命は、一般的に決起宣言（プロヌシミアメント）あるいは蜂起（アルサミアメント）であり、これら二つの言葉は、ある一人の人間が事物の新しい秩序を宣言し、またはこれを強制するために立ち上がることを暗示している」と述べている。（マダリアーガ著、佐々木孝訳『情熱の構造——イギリス人、フランス人、スペイン人』れんが書房新社、1985年、223頁。）

46) 関哲行・中塚次郎・立石博高編『世界歴史大系スペイン史〈2〉近現代・地域からの視座』山川出版社、2008年、88頁。

47) J. ソペーニャ『スペイン——フランコの四〇年』講談社、1977年、18頁。

48) Wenceslao Fernández Flórez. "Impresiones de un hombre de buena fe". 14 Noviembre. 1923. ABC. pp. 3-4.

彼もまた、「模範性」というものを重視しながら、独裁という新たな秩序によって、当時の社会に蔓延していた不正が正されることを、期待していたのである。

だが、プリモ・デ・リベラ将軍は独裁政権を確立した後、まずは議会を解散し、憲法を停止し、資本主義擁護のために、労働運動と地方自治運動の弾圧を行なった⁴⁹⁾。そして、検閲を設けることにより、言論の自由を抑制し、新体制に対する反対派を次々に投獄または国外へ追放するなどして、過度な制限を課すのであった。フェルナンデス・フローレスは、彼の独裁政権への失望を、翌年の1924年1月1日の記事で、下記のように露わにしている。

死んだ年をインタビューに出したかった。当然のことながら、死人を相手にすれば誰にでも起こりうることに私も起きた。私は3フィートの燭台の前に座り、彼の精神を呼び起こし、待っていた。1923年の精神は来た、まるでそれが彼の義務であるかのように。そして彼は非常に親切であった。彼は、目隠しした霊媒師に彼の言葉を書きとってもらうことに応じてくれた。しかし、私はそれを再現することができない。紙が消し跡だらけだったからだ。最後の一行だけ何とか読み取ることができた。それは、次のように書かれていた。「ここにも検閲があります。—担当者 テミストクレス」(書判)⁵⁰⁾

このように、彼は独裁政権が樹立した1923年を「死んだ年」と称し、当時における検閲を批判している。

この独裁体制期には、既に社会の近代化が推し進められていた。かつては農業主体だったスペインの産業構造は、サービス業・工業中心へと変化していた。プリモ・デ・リベラ将軍が公共事業、道路建設やガソリン配布網の拡大などのインフラ整備に努めたことによって、自動車所有数が増加し、民間航空機も登場した。また、消費行動が一般化し、都市部の人びとは百貨店を訪れ、家電や自動車を購入するようになっていた。さらに、映画やスポーツなどの娯楽産業も発達し、徐々に大衆文化が形成されていっ

49) 長谷川公昭『ファシスト群像』中央公論社、1982年、101-102頁。

50) Wenceslao Fernández Flórez. "Apenas del reloj". 1 Enero. 1924. ABC. p. 17.

た⁵¹⁾。スペインの著述家ラモン・マリア・デル・バーリエ＝イン克蘭（Ramón María del Valle-Inclán: 1866-1936）は、この時期に“*Luces de Bohemia*”（1924）という戯曲を執筆し、その中で、「スペインはヨーロッパ文明のグロテスクな変形である⁵²⁾」と説いている。

このように、プリモ・デ・リベラ将軍による独裁政権によって、かつての輪番制による政治的混乱は除去されたが⁵³⁾、代わって検閲や反対勢力の国外追放などの圧政が行なわれた。また、プリモ・デ・リベラ将軍が中流階級の生活水準の向上を目指し、低金利政策やインフラ投資などを行なった結果、都市部では消費文化が益々浸透していった。だが、その一方で、都市部と郊外における貧富の格差もまた広がっていった。第一次世界大戦後の混沌とした社会状況を收拾するものと期待されていた独裁政権は、結局のところ、人びとを一つに結束させるどころか、反対に人びとの大衆化を促進させ、当時の経済的格差に歯止めをかけることはなかったのである。

この時期には既に、かつてのスペインの伝統において重要であった「宗教」による結束もまた、薄らいでいた。1924年の時点で、スペインの文豪アソリン（Azorín: 1873 -1967）は、「スペインは深遠なキリスト教国である。キリスト教において、美德こそが人生の極致である⁵³⁾」と説き、以下のように述べている。

宗教こそが、かつては真の祖国であった。おそらく今日、私たちは国家の下で17世紀の頃よりも、端から端まで孤独感と疎外感を感じているのかもしれない。精神的な結束は既に崩れてしまいました。……宗教は唯一無二のものであり、誰も侵すことのできないものであり、かつてそれはすべての心の一つにしていた。信者はその信仰心の中に、全ての信者への兄弟愛を有していた。⁵⁴⁾

51) 山道佳子「第3章 王政復古期の文化」立石博高編著『概説近代スペイン文化史——18世紀から現代まで』ミネルヴァ書房、2015年、81頁。

52) Ramón María del Valle Inclán. 1924. *Luces de Bohemia: Esperpento lo Saca a Luz*. Madrid: Renacimiento, p. 225.

53) Azorín (José Martínez Ruiz). 1924. *Una Hora de España (Entre 1560 y 1590). Discurso leído ante la Real Academia Española*. Madrid: Imprenta de Rafael Caro Raggio, p. 81.

54) *Ibid.*, p. 59.

アソリンは、この時期においては、既にかつての宗教的結びつきが崩壊しており、この時代の人びとは精神的に孤立してしまっているとした。彼が指摘しているように、スペインは「キリスト教国」であって、国内の人びとを結びつけるための精神的核が宗教にあるという点は重要である。次の節で詳しく述べるが、フェルナンデス・フローレスもまた、社会におけるキリスト教的美徳の存在を重視しており、それに対する危惧が彼の作品に色濃く反映されているのである。

近代スペインにおいて、宗教的規範は薄れ、「理念」や「美徳」に代表されるような「模範性」は、次第に影を潜めていった。そして、このような「模範性」の欠如と、当時のスペイン社会における近代化を背景として、フェルナンデス・フローレスは1926年に『七つの柱』を執筆するのである。

四 近代社会における『七つの柱』

フェルナンデス・フローレスの『七つの柱』における柱とは、キリスト教における原罪のことを指す。悪徳がなくなったことにより社会が衰退するという図式は、イギリスの思想家バーナード・デ・マンデヴィル (Bernard de Mandeville: 1670-1733) が1714年に『蜂の寓話』で既に描いている。マンデヴィルは『蜂の寓話』によって、「人間を社会的な動物にしてくれるものは、交際心とか、善良さとか、哀れみとか、温和さとか、そのほかのうるわしい外面をもつ美点にあるのではなくて、人間のいちばん下劣で忌まわしい性質こそ、彼をこのうえなく大きな社会に、そして世の中の通年に従えば、このうえなく幸福で繁栄する社会に、適合させるのにもっとも必要な資質である⁵⁵⁾」ことを証明した。彼の観察によれば、人間は生まれつき、他者の幸福よりも自分自身の幸福にずっと強い関心を抱くのであって、したがって、他者の繁栄を、自分自身のそれよりも、実際に本心から愛好できるはずはないという⁵⁶⁾。ホセ・アティラーノ・ペーナ・ロベス José Atilano Pena López は、フェルナンデス・フローレスの『七つの柱』とマンデヴィルの『蜂の巣』との比較を行い、人間は本質的に利己的であ

55) マンデヴィル著、泉谷治訳『蜂の寓話——私悪すなわち公益』法政大学出版局、2015年、3頁。

56) アダム・スミス著、高哲男訳『道徳感情論』講談社、2013年、569頁。

り、「利益最大化主義者」であり、社会と経済は伝統的な道德の観点から見れば、「悪徳又は罪」に映るものの上に成り立っていることを認識しているという点で、両者とも類似しているとした⁵⁷⁾。

ここで重要なのは、フェルナンデス・フローレスが「悪徳」をどのようなものとして捉えていたのかということである。『七つの柱』の解釈を巡っては、これまで大きな誤解がなされてきた。『七つの柱』が人間社会における罪悪の必要性和社会主義への懸念を描いた作品だ、という誤解である。まず、この作品に関する当時の批評は以下のとおりであった。

本書では、著者の社会批判のメスが、最も議論されていないテーマの最も深く、そして最も強固な根源にまで差し込まれている。これは鋭い皮肉に満ちた小説であり、一つのパラドックスである。……組織、繁栄、さらに社会的幸福において、悪徳・原罪は、重要な活力なのだ。⁵⁸⁾

ここでは、人間の社会にとって「悪徳・原罪」が「重要な活力」であると認識されている。さらに、ホセ・マリア・アルベリッチ・ソトマジョール José María Alberich Sotomayor は、『七つの柱』について、「もしもこの物質主義の地上において、人間社会が、人類が皆、美德と無欲に満ちた完璧な見本であったならば、その社会は自滅してしまうだろうと想像することは、それ自体がかなりの的を射ている予言である⁵⁹⁾」として、「1926年に小説を発表したフェルナンデス・フローレスは、そのほんの少し前にロシアで賞讃され、他のヨーロッパ諸国でも既に大きな影響力を持っていた社会主義の未来が間近に迫っているを感じとっていたようだ⁶⁰⁾」と述べている。

しかし、『七つの柱』において、社会における罪悪の必要性および社会主義に対する懸念が、フェルナンデス・フローレスの最も意図していたことというわけではない。別言すれば、同書において、美德と無欲のユート

57) José Atilano Pena López. 2003. Wenceslao Fernández Flórez y la tradición liberal: Las Siete Columnas. *Wenceslao Fernández Florez y su tiempo: evasión y compromiso en la literatura española de la primera mitad del XX*, pp. 1-16.

58) J. López Prudencio. "Crítica y Noticias de Libros." 26 Mayo. 1926. *ABC*. p. 27.

59) José María Alberich Sotomayor. 2005. Fernández Florez y la progresía. *Boletín de la Real Academia Sevillana de Buenas Letras: Minervae Baeticae* 33, pp. 111-116, p. 114.

60) *Ibid.*, p. 115.

ピアはその批判対象ではないのである。フェルナンデス・フローレスは、同書でキリスト教的規範に背く人間の悪行を肯定しているわけではなく、また人間社会における罪の必要性を唱えているわけでもない。彼自身は、この作品における意図について、以下のように語っている。

……私は自分の事をかなりわかりやすい作家であると思っているのですが、ほとんどの批評家は私の意図をよく理解していないようなのです。例えば、今のところ私の著書の中で最も多くの人びとの支持を得ている『七つの柱』においては、私が本書で「七つの大罪を人間の幸福にとって有益であるだけでなく、必要不可欠なものであるとし、我々の進歩はそれらの上に成り立っていることを証明しようとした」と一般的に言われています。これは、真実とはかけ離れています。私が伝えたかったことは、今日の美徳、あるいは美徳と呼ばれるものは捏造されており、それらの隠された根源は、真の道德ではなく、人間が犯すであろう全てを集約した七つの罪から得ているということだったのです。⁶¹⁾

つまり、彼の真の意図は、当時の「美徳」、「善きこと」とされていたものは偽造されたものであって、人間達は本来、本物の「美徳」に基づいた文明を築きあげるべきであったにも関わらず、いつのまにか「原罪」に基づいた文明を築きあげてしまったことを、この作品によって証明することであった。したがって、彼の真の批判対象とは、「近代における道德」である。彼は、罪から解放された「ユートピア」を描くことで、当時の「善きもの」、「道徳的とされているもの」、「美徳とされているもの」等の正体を曝こうとしたのであった。

この作品では、前半部分で「罪」の世界が、後半部分で「無罪」の世界が、それぞれ描かれている。前半部で彼が示している「悪徳」は多種多様であるため、ここではそれらの一部分だけを切り取って言及する。まずは、以下のような場面がある。

61) Wenceslao Fernández Flórez. 1954. *Obras Completas Tomo I*. Madrid: AGUILAR, p. 17.

進歩には、あなた、足がありません。独りでは歩けないんです。いかに利用価値の高い発明も、実験室に停っている間是一个の珍奇に過ぎませんし、書物に書かれても一つの学説でしかありません。それを真に有益なものたらしめるには、工業化する必要があります。金のある人間、金をもっと儲けたい人間が出て来て、それに金の車をつけ、後から押し出します。進歩とはこういうのが進歩です。前進して、世間へ拡まります……電話も、印刷も、電気も、航空もみな、こうでした……⁶²⁾

これまでの進歩は、工業化とそれによる資本の蓄積によって成されてきた。このような環境によって、フェルナンデス・フローレスは「貪欲は昇華し、思想化され⁶³⁾」、数字への偶像崇拜が浸透したとしている⁶⁴⁾。他の場面でも、当時において、貯金ないし「資本の蓄積」が文明の証とされ、それがまた「善きこと」と認識されていることを彼は示唆している⁶⁵⁾。フェルナンデス・フローレスは、以上のように工業化と資本主義化の傾向を取り上げながら、資本主義の弊害である格差社会の底辺で生きる労働者を以下のように描写している。

諸々の労働のなかで最も苛酷な仕事を選んだアブディーアスは、深い坑道のなかで、湿気を帯びた、そして希薄になった空気を吸いながら、太陽のない日々を生きた。落盤事故で出口がふさがれた時には、長いあいだ死を待ち続けた。あの粗末な小屋と山を吹き渡る風を、そして澄んだ空気のもとでの森の自由な生活をなつかしく思い起こした。また、失業をもたらす暗鬱な不景気やストライキの最中の押し殺した憤怒を経験した。こうして彼は、正体不明の怪物のような敵であり、彼にはあらゆる不幸の元凶のように思われた「資本」を憎悪するようになった。彼にとって、また彼の仕事仲間たちにとって、人生が与えう

62) Wenceslao Fernández Flórez. 1969. *Las Siete Columnas*. Madrid: Colección Austral, p. 160; 永田寛定訳『七つの柱』河出書房、1977年、196-197頁。

63) *Ibid.*, p. 159; 永田寛定訳『七つの柱』河出書房、1977年、194頁。

64) *Ibid.*, p. 159; 永田寛定訳『七つの柱』河出書房、1977年、194頁。

65) *Ibid.*, p. 27; 牛島信明訳『七つの柱』小学館、1997年、38頁。

る唯一の慰安は、アルコールであった……アブディーアスがはじめて吐血したのは、それから二年半ほど経ってからのことである。⁶⁶⁾

上記で述べられている労働者アブディーアス・マルサンは、まさに「資本」による問題を体現する人物である。彼は仕事場の劣悪な環境によって、病気を患い、医師から療養を勧められるが、自らの家族を養うために、より苛酷な仕事場である溶鉱炉へ赴き、最終的に過労死を迎える。フェルナンデス・フローレスは、労働者たちにこのような末路を強いる資本主義社会の暗部を描きながら、それと同時に「機械化」についても、以下のように叙述している。

ネグリーミアの荒地にアブディーアス・マルサンの墓穴が掘られてから、既に二年経った。溶鉱炉は相変わらず人間と石炭を貪っていた。暴戾な工場の群落は、平野の中ながら、モロー博士が物の本質を高め、生物ではなく、無機物を鍛錬する島とも思われた。ウエルズの不思議な人物の居間で、動物が苦しみ叫ぶように、ネグリーミアの工場では、一見無感覚な物質が悶えていた。……汗と煤にまみれ、喧騒を極めるその中で物も言わない人間は、あの処刑の手伝いに外ならなかった。されば、博士の架空な動物がいとも怪しい姿ながら、精神を高められて、苦痛から出るとく、打たれ、灼かれ、孔を穿けられ、ねじ曲げられ、やすりをかけられた物質は、やがて人間性の印を受けた。それが機械だった。人間性の印以上のもの、人間そのものの一部にもなった。腕を長からしめる剣、殺意となって飛んで行く弾丸、われくの鈍重を補う汽車を走らせる軌道、われくの言語の声や符牒をつたえる針金、労働を容易ならしめ完全ならしめる道具、針、鋤、金庫の鉄、庭園を囲む格子の鉄、思想を書きとめてこれを伝播させるペンの薄金、等々だ。鉱塊の裂離により、工場の陣痛を以て、地球はわれくの小弟共を生んでいた。それが虫けらから大象に至る生きた動物のように、数も種類も多い機械だった。⁶⁷⁾

66) *Ibid.*, pp. 69-70; 牛島信明訳『七つの柱』小学館、1997年、98-99頁。

67) *Ibid.*, pp. 77-78; 永田寛定訳『七つの柱』河出書房、1952年、91-92頁。なお、小学館が1997年に出版した翻訳本では、この部分の一部が割愛されている。

彼は、ここであえて 20 世紀における代表的な未来小説家 H.G. ウェルズ (Herbert George Wells: 1866-1946) を引きあいに出し、「機械」が「人間」の生活を侵食しつつあることを示唆している。このような「機械化」を背景として、人びとは益々「神」という概念から離れていくのである。

このような乖離現象は、学問の領域にまで及んでいるとされる。彼は、以下の場面でこの問題について言及している。

三か月めには、主だった先進国の学者が集まって生物学の諸問題を議論する国際会議に参加してみた。ところが、万物をお造りになった方のお名前が口の端にかかることは、ただの一度もなかった。……私は、「だが、精神や知性はどうして生まれたんです？」と訊ねてみた。すると、こんな答が返ってきた。

「……われわれ人間は自然界の頂点に位置しているが、だからといって、われわれが何か特別な力によって、卒然とこの世に現われ出たとするのは真実ではない」

これが私が会議で聞いたところだが、私はかつて、こんな発言をする奴ほど「造物主」から遠ざかっている人間を見たことはなかったよ⁶⁸⁾

人間が自然の頂点であるという考えのうえに、学問が国際規模で成り立っている。そこには、人間を生み出した「造物主」という存在はなく、ただ人間が君臨するのみである。フェルナンデス・フローレスは、1925 年 11 月に、ヒューマニズムの問題について、以下のような記事を発表している。

彼らは創世記 (el Génesis) において、種がどのようにして地球上に現れたのかについて、非常に明確で満足のいく説明を受けているにも関わらず、彼らは、アスピリンの販売員以外は誰も得することはないであろう、進化論というものについて思いを巡らせ、苦勞しているのです。そして、ヒューマニストと名乗る人びとの愚かさといったらどうでしょう？スペインにおける今日の統治者の一人が「感傷的ユートピア」と適切に表現した恥ずべき感情に駆られて、彼らは、攻撃的な

68) *Ibid.*, pp. 136-137; 牛島信明訳『七つの柱』小学館、1997 年、205-206 頁。

思想を新しい世代から遠ざけようと言い張っています。そして、このことをヒューマニズムと呼んでいる。

とてつもなく支離滅裂な言動ではありませんか！人類は常に戦争を行ってきました。それ故に、平和の理想にその名を冠することは矛盾しているのです。人間は、好戦的な性質を有している存在なのであります。⁶⁹⁾

彼によれば、人間というものは本来、好戦的な存在である。それにもかかわらず、その性質に反して、平和の理想を「ヒューマニズム」という言葉で表現しようとするのは矛盾である。

このような「ヒューマニズム」に従い、人びとは古来の「神」から離れる一方で、「神」に代わって自分たちにある種の存在意義を与えてくれる存在をつくりあげる。それが「国家」(El Estado)という概念である。フェルナンデス・フローレスは、ナショナリズムによって、高揚させられている大衆を、次のような場面で書いている。

あちらこちらで、その姿の定かではない人の群れから、興奮した者たちの「……を倒せ」、「……に死を」という声が沸きあがっていたが、その時突然、王宮の中ほどにある巨大なバルコニーの、その廂にとりつけられたすりガラスの電灯がともされた。その点灯がまるで啓示の予告でもあるかのように、群衆は急に静かになった。首相が手を大きく広げて話し出すと、広場全体が期待にうち震えるひとつの塊と化した。距離ゆえに弱まり、途切れ途切れになった言葉がフロリオのところまで届いた。「わが国の栄光ある歴史……」、「国家の名誉にかけて……」、「われわれは……にふさわしい国民であることを実証しよう」、「戦いあるのみ……」⁷⁰⁾

ここではナショナリズムによる民衆扇動が描写されており、「栄光ある歴史」、「祖国の名誉」といった輝かしい「美德」が挙げられている。フェ

69) Wenceslao Fernández Flórez. "Me parece a mí……". 5 Noviembre. 1925. *ABC*. p. 6.

70) Wenceslao Fernández Flórez. 1969. *Las Siete Columnas*. Madrid: Colección Austral, p. 133; 牛島信明訳『七つの柱』小学館、1997年、201頁。

ルナンデス・フローレスは、1923年に出版した『青髯の秘密』（“*El Secreto de Barba Azul*”）で、国家（El Estado）に依る「正義」や「道徳」の問題について、以下のように言及している。

私たちの社会における「正義」は、他の多くの厳かな概念と同様に、慣例的な基盤の上に成り立っています。まず慣例主義が作られ、それを保護するための道徳的な法が作られるのです。まず最初に財産が生まれ、その後に強盗、窃盗、詐欺や不正などを罰する規範がくるのです。しかし、財産は「自然に秩序づけられたもの」ではなく、合意に基づく取り決めでありまして、そうでなければ、それは上手く成り立たなかったか、考えられなかったのであります。よって、この場合は結果的に、それに基づく倫理観（la ética）も異なってしまいます。

このことを私たちが理解すると、「道徳」（la Moral）は、死後の制裁を伴う、不変であり永遠の前提に由来する大いなる力を失うこととなります。「汝、殺すなかれ」と云われていますが、私たちの周りにある自然を見てみますと、すべてが破壊のために作られており、それらの行為には何の慈悲もありません。憤怒による戦いや、他者の命を軽んじることの例は、いたるところで私たちに提示されています。もしも世界で殺人が排除された場合、今までそれによって生きていくように作られた多くの動物種は、消滅するでしょう。つまり、私たちのことでもあります。

私たちは今まで同胞たちに対する暴力を断罪してきたと、本当に断言することができるのでしょうか？いいえ、できるわけがありません。私たちは個人が犯罪の主導権を握ることを否定し、その権利を国家（El Estado）に独占させただけであります。国家（El Estado）は死を命じることができるようになりました。そして、そのように取り決められた道徳（la moral）は、このような大虐殺によって苦しむどころか、繁栄していくのです…それは受け入れがたいパラドックスであります。⁷¹⁾

71) Wenceslao Fernández Flórez. 1940. *El Secreto de Barba Azul*. In *Las Novelas Del Espino En Flor*, pp. 17-244. Madrid: Ediciones Españolas, pp. 108-109.

彼は、人間社会における「慣例主義」に基づく法は、キリスト教が示す本来の「道德」(la Moral)のような「自然に秩序づけられたもの」ではないことを、上記のように指摘している。また、それにより、人びとは、自分たちで作りあげた慣例主義に則った法を正当化するために、自分たちで新たな倫理観 (la ética) を作りあげ、本来の道德 (la Moral) から乖離していったとする。そして、その代替物として、彼らは国家に依って取り決められることが可能な新たな道德 (la moral) をもつくりあげるに到ったとしている。この新しい道德 (la moral) は、国家のための流血を容認する。その道德と結びついた観念の一つが、「祖国」である。彼は、「祖国」について次のように述べている。

祖国とは、全てにおいて、私たちが思い描くモロク (Moloch)⁷²⁾ のようなもので、流血の犠牲によって養われているのです。……他の全てのことはこれに基づいているのです。要塞群の影で、賢者は研究し、工場は生産し、指導者達は統治し、商船は海を渡る。銃剣の数が多ければ多いほど、文明や勢力は大きくなります。そのため、昨日まで自分達を幸運だと思っていた人民が、突然の大惨事によって、今日には不幸な身の上となってしまうことがあります。なぜなら、冷淡なうえ、大砲で焔めいた魂を地盤とする幸福は、欺瞞的で悪魔的な体裁以外の何物でもないからです。⁷³⁾」

「祖国」という概念を振りかざし、流血や暴力によって社会を拡張させていくことが、人びとの「幸福」に結びつけられている。フェルナンデス・フローレスは、このことを「欺瞞的かつ悪魔的」と評している。

『七つの柱』に戻ろう。以上のような誤った価値の規範の上に成り立ってしまった世界を、同書の登場人物である隠者アクラシオは嘆く。『七つの柱』において、彼は地上で唯一信仰を保ち続けている人間である。デルフィン・カルボネル・バセット Delfín Carbonell Basset は、フェルナンデス・フローレスの作品群に共通する人物像について以下のように語っている。

72) 古代から伝わる生け贄を欲する神または偶像を指す。

73) Wenceslao Fernández Flórez. 1940. *El Secreto de Barba Azul*. In *Las Novelas Del Espino En Flor*, pp. 17-244. Madrid: Ediciones Españolas, pp. 144-145.

（フェルナンデス・フローレスが）私たちに提示しているのは、人生に直面した人間についての問題、敵意に満ち、残酷で、冷酷で、無意味な世界を前にした人間の完全な孤立である。われらが作家の登場人物たちは、「精神的な孤立」に苦しんでいるのだ。⁷⁴⁾

隠者アクラシオもまさに、精神的孤立を抱えた人間である。そして、彼の長年の宿敵であったサタンもまた、孤独を抱えている。ここで描かれている悪魔の位置づけが、まさに古来の価値規範におけるバランスの崩壊を示しているのである。

悪魔とは、人間を神の手から離れさせ、地上（俗世）へ墮落させた者である。これにより、人類は自らの手で自らの身を守ることを余儀なくされ、自分たちで自らの「文明」を築きあげていったのである。つまり、サタンこそは人類における自由な社会にとっての「神」である。ジョルジュ・ミノワ Georges Minois は、「十九世紀の自由思想という文脈のなかにあっては、悪魔は一種のプロメテウスとして、すなわち、人間の解放者ないしは科学と進歩の推進者として把握されている⁷⁵⁾」と述べている。フェルナンデス・フローレスは、明らかにこのような文脈を理解して、『七つの柱』の中でサタンに、「私は何世紀ものあいだこの世の主人だった⁷⁶⁾」と語らせている。だからこそ、サタンは、自由な人間たちの神としての責務を、永遠に背負わなければならないのである。だが、人間たちは、もはや悪魔すら必要としていない。無信仰が漂う世においては、アクラシオ以外の人間達は、誰一人として神はおろか悪魔すらも信じていないのである。『七つの柱』の冒頭部分で、サタンは次のように述べている。

「地獄とはこゝだ。地獄とは人間が蕃殖する地面だよ。わしが受けた罰は人間を棄てられないこと、人間の愚かさと卑しさを見てくらすことにある。これが高い知性に対して意味する苦難のおそろしさを思ってくれ。むかし、わしが認められたころは、悩みも耐えやすかった。

74) Delfín Carbonell Basset. 1966. Fernández Flórez: Humorismo y tragedia. *Anuario de Letras: revista de la facultad de filosofía y letras* 6: 223-233, p. 230.

75) ジョルジュ・ミノワ著、平野隆文訳『悪魔の文化史』白水社、2004年、137頁。

76) Wenceslao Fernández Flórez. 1969. *Las Siete Columnas*. Madrid: Colección Austral, p. 14; 牛島信明訳『七つの柱』小学館、1997年、15頁。

愛でも憎しみでも、受けてさえいれば、精神が衰えない。……しかし、わしは今、玉座を逐われた帝王よりも悲しんでいる。類のない苦難を受けているのだ。口を利いても耳に入れられず、姿を見せても眼に止められない……昔恋しさと張合いなさで、無聊のやり場に苦しむのだ。この広い世界に、おまえよりも感心な人間はいないよ。わしは沙漠という沙漠、深山という深山、幽谷という幽谷をさがしたが、おまえ一人だね、よみすべき伝統と、好い時代の修行と、昔ながらの信仰を伝えているのはさ……⁷⁷⁾」

上記でサタンは、近代の人間社会こそが「地獄」であると語っている。そして、そのような現状をもたらした原因として、アクラシオは「無信仰」の問題を挙げ、それにより「殺戮は榮譽を意味し、貪慾は社会的美徳とされている⁷⁸⁾」と述べている。このようなアクラシオの発言に対して、サタンは「人間たちに起こっていることの全ての罪が私に帰するものではない⁷⁹⁾」と語る。サタンとアクラシオのこのやり取りは、人間たちが神という観念から脱したことで、自らを律するための規範を失ったこと、そして、人間たちが自らを世界の頂点たらんとし、自ら神を否定し、最終的には神という存在自体に対する無関心へと至ったことを示唆しているのである。

アクラシオは、このようなモラルの反転現象を正すために、サタンに七つの罪源を消し去るように命じ、「神による創造物である心を清純で純粋なものに、樂園と共に失われた平和を地球上に取り戻してほしい⁸⁰⁾」と頼む。それに対し、サタンは美徳を与えることはできないが、罪を取り去ることはできるとし、アクラシオの願いを叶える。

そうして、無欲の世界が訪れ、過去の悪行が全て修正される。人びとがかつては戦争に駆り立て、ナショナリズムに基づく「美徳」を振りかざしていた偶像⁸¹⁾は、世界が罪の無いユートピアとなった後、かつてそれらを

77) Wenceslao Fernández Flórez. 1969. *Las Siete Columnas*. Madrid: Colección Austral, pp. 15-16; 永田寛定訳『七つの柱』河出書房、1952年、12-13頁。

78) *Ibid.*, p. 137.

79) *Ibid.*, p. 139.

80) *Ibid.*, p. 139.

81) ベネディクト・アンダーソンは、近代文化におけるナショナリズムの表象 (emblems of the modern culture of nationalism) について、次のように述べている。「無名戦士の墓と碑、これほど近代文化としてのナショナリズムを見事に表象す

利用していた大臣や貴族たちによって結成された集団「つぐないの石屋」によって、取り壊される。この集団の一員であるピリータ侯爵は、以下のよう話している。

わたくしどもは古い酷たらしい暴虐の偶像を打ちこわし、人類の誤った信仰の対象がどこに建っていたかを知りうる痕跡も残らぬまでに致したいとぞんじます。……これこそ、わたくしどもの仕事でございましょう。無数の殺人を思い出させる名前、青銅の心臓をもった者共の青銅の像、流血の地に生えた勇壯の月桂樹を捧げる女人像…一切のものが碎かれ、熔かされ、抹消されて、人間の記憶に、さような恐怖の思い出を残さないでございませぬ。わたくしどもの宗団の名称はまだ決定して居りませぬ……多分、「つぐないの石屋」と名乗ることになりませぬ⁸²⁾

偶像に対するたたかいは、モーセ五書から、イザヤ、エレミヤにいたるまで旧約を貫く宗教的テーマである⁸³⁾。人類の誤った信仰の象徴である偶像を破壊することによって、彼らは過去の償いをするのである。そうして、彼らは自分たちの過度な熱情と性質の投影であった偶像から解放される。しかし、このように過去の不正や偽善が正される一方で、罪を失った多くの人びとは、「広大な世界でうろろする哀れな動物」となっていた。そして、罪無き世界において、近代社会は以下のように崩壊していた。

「誘惑」の消滅とともに生じた諸々の弊害が、年とともに顕著になっていた。そして、所有権はもうほとんど存在していなかった。まず、

るものはない。これらの記念碑は、故意にからっぽであるか、あるいはそこにだれがねむっているのかだれも知らない。そしてまさにその故に、これらの碑には、公共的、儀礼的敬意が払われる。」(Benedict Anderson. 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London and New York: Verso, p. 9. (白石隆・白石さや訳『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』リポート、1987年、24頁。)

82) Wenceslao Fernández Flórez. 1969. *Las Siete Columnas*. Madrid: Colección Austral, p. 198; 永田寛定訳『七つの柱』河出書房、1952年、244頁。

83) Erich Fromm. 1986. *You Shall Be as Gods: A Radical Interpretation of the Old Testament and Its Tradition*. New York: Fawcett Premier, p. 36. (飯坂良明訳『自由であるということ——旧約聖書を読む』河出書房新社、2010年、56頁。)

価値の大暴落が生じ、それによって所有権にひびが入り、遂には、それを支えていた柱が折れることによって崩壊してしまったのだ。社会のバネで正常に機能しているものはなにもなかった。官憲は力を行使することがなくなったので、誰もその権威を認めなくなってしまった。かくして人間は、広大な世界でうろろする哀れな動物のようになったのである。⁸⁴⁾

近代文明は、罪という指針をなくしたことによって、ついに終焉を迎えたのである。そして、職を失い、瘦せ衰え、罪なき世界に耐えきれなくなった群衆は、罪を返してくれるようにサタンへ懇願するために、罪の神が住む山へ向かう。そして、その光景を目の当たりにしたアクラシオが、彼らを哀れみ、彼らと共に街を去るところで、『七つの柱』は幕を閉じる。アクラシオは最後、以下のような台詞を残す。

……人間が悪のなかで、悪によってでなければ生きていけないというのは真実ではない。なるほど、この人類と文明は悪を基盤にしていたのかも知れない。また、今日まで地球上に現われたすべての人間とすべての文明が悪から栄養を取り、さらには、残酷な憤怒をブレーキに、強欲を指針に、傲慢を助言者に、嫉妬を拍車として用い、そうすることによって愛を汚し、強者におもねり、カインを賛美してきたということはあるようだ。しかし人類はまだ年端もゆかぬ子供であって、いまだ幼少期を終えていないんだ。いずれ到来する深い神秘にとどされた世紀においては、その幸福と進歩のすべてを善から引き出すような高邁な人類が現われるであろう。まだまだ遠い未来のことであろうが、彼らにとって担われる幸多き文明は存在すべきであり、それに比べると、今日壊滅した文明は慄然とするほど野蛮なものということになる。そして、もしそうした文明が実現することなく、人間がいつまでも今のままでいるとしても、人間の悪と錯謬、人間の不正と邪淫のおぞましさを悟って苦悩する人の絶望を遠ざける唯一の手段として、新たな世界の到来を待望し続けることは必要であろう。その時代を信じ

84) Wenceslao Fernández Flórez. 1969. *Las Siete Columnas*. Madrid: Colección Austral, p. 214; 牛島信明訳『七つの柱』小学館、1997年、247頁。

なさい。はるか彼方の、幸せに満ちた時代の実在を予告するものがある。つまり、そうした時代がやってくるようにと願うわれわれの気持ちだ。これまで人間に生じたところはすべて、かつて人間がそうあれかしと願ったことなのだから⁸⁵⁾

フェルナンデス・フローレスは、以上のアクラシオの台詞に、当作品における彼の意図が集約されていると述べている⁸⁶⁾。アクラシオは、人びとがキリスト教的美徳から未来に向けた理念を導きだし、いつの日か、善に基づいた文明を新しく築きあげることを期待する。これは、フェルナンデス・フローレス自身が抱いていた希望でもあった。だが、この物語の結末において、近代の人びとは無欲のユートピアには耐えきれず、悪魔に罪を返してくれるように懇願するのである。フェルナンデス・フローレス自身がそのようなユートピアの終焉を叙述していることから、ホセ・カルロス・マイネル José Carlos Mainer は、当作品を「理想の敗北を込めたユートピア小説⁸⁷⁾」と評している。フェルナンデス・フローレス自身もまた、この作品に込めたもう一つのメッセージとして、「私たちはまだ、神の命を実行する段階には到っていない⁸⁸⁾」と述べているように、現在の人類が宗教的教義を遂行できるほど成熟してはおらず、未だに「幼少期」の最中にいることを伝えようとしたのである。

彼は、当時のスペイン社会について、「ナショナリズムは商売を隠し、美徳はキリスト教の本質を失い、慣例的なものとなり、愛の外観は偽善的で、退屈で、干上がったものとなり、修復を必要とするほど俗悪で古ぼけたものになってしまった⁸⁹⁾」と述べている。マイネルは、『七つの柱』について、「近代の資本主義による嵐に直面することで、著者の経験した階級的な疎外感が、原始的で自然なものへのノスタルジー（今まで見てきたように、彼の作品における本質的なテーマである）、モラリストの不安、終

85) *Ibid.*, pp. 223-224; 同上 259-260 頁。

86) Wenceslao Fernández Flórez. 1954. *Obras Completas Tomo I*. Madrid: AGUILAR, p. 18.

87) José Carlos Mainer. 1975. *Análisis de una Insatisfacción: las Novelas de W. Fernández Flórez*. Madrid: Editorial Castalia, p. 243.

88) Wenceslao Fernández Flórez. 1954. *Obras Completas Tomo I*. Madrid: AGUILAR, p. 18.

89) *Ibid.*, p. 16.

末的なものに対する感性へと彼を導いており、これらは要するに、一つの時代における病状である⁹⁰⁾と説く。すなわち、フェルナンデス・フローレスの描いたユートピアは、近代における混沌とした社会状況によって生み出されたのである。そして、それは、そのような悲惨な現実には敗北する。しかし、彼はこの作品において、近代文明がどのような柱を基盤として成り立っているのかということ暴露し、それによる問題点を詳細に指摘もしている。そのため、アクラシオの最後の台詞でも叙述されているように、将来における「善き文明」に向けた改善の余地は、なおも残されている。

フェルナンデス・フローレスが、『七つの柱』において、近代社会における「柱」であり、「捏造された美德」と呼んだものとは、功利主義、合理主義、ナショナリズムなどに基づく近代的価値規範に依るものである。そして、こうした「柱」や「捏造された美德」の背景にあるのは、人びとを精神的に束ねることができたはずの宗教的美徳の欠如であった。それは、人間が神から解放された後、完全に神の世界と断絶し、人間たちだけの世界を構築していったことの帰結である。彼らは、世界を自分たちだけで満たすあまり、古来の宗教的美徳を忘れてしまった。これにより、人びとは文明を構築するうえで必要であった正統的規範を失ったのである。

近代を迎えたことで、かつての共通の価値規範は空虚なものとなり、人びとの個人化が進行し、彼らの多くは大衆となった。フェルナンデス・フローレスは、自らのユートピアによって、罪源の上に成立している近代社会が掲げている美徳の偽善を晒し、その上に成り立ってしまった社会の崩壊を描いたのである。

おわりに

本稿では、これまでのユートピア研究において、十分に言及されてこなかった一つの「保守的ユートピア」について、主にその思想的コンテクストに焦点を当てながら検討した。保守的ユートピアとは、過剰な自由への危惧とそれに対するかつての普遍的規範に則った縛りの必要性を説くものである。本稿において、それは20世紀前半に起こった「ヨーロッパ化」

90) José Carlos Mainer. 1975. *Análisis de una Insatisfacción: las Novelas de W. Fernández Flórez*. Madrid: Editorial Castalia, p. 243.

を背景として、スペインにおける社会的規範および模範が見失われたことを問題視したフェルナンデス・フローレスという人物によって表わされた。イデオロギー的には右派に属していたフェルナンデス・フローレスだが、ケストラーやオーウェルたちと同様に、当時における問題と真摯に向き合っていたことは間違いない。フライは、ユートピア作品の成立における背景について次のように述べている。

モアの『ユートピア』は、16世紀イングランドの生活の混沌を風刺することから始まり、それとの対比としてユートピアそのものを提示している。このように、典型的なユートピアは、暗にはあるが、作家自身の社会に内在する無秩序への風刺を含んでおり、ユートピアという形式は、無秩序が最も社会的な脅威であると思われるときに最も繁栄するのである⁹¹⁾。

フライが説いているように、ユートピア作品は現実の無秩序状態に対して、何らかの秩序を打立てようとする人間たちの意志によって生み出される。そして、それは必然的に当時の無秩序への脅威を象徴しているのである。

ユートピア作品においても、「ディストピア」作品と呼ばれるものにおいても、かつてトマス・モアが『ユートピア』を執筆した際もそうであったように、これら両者の背景には常に、何らかの秩序を打ち立てざるを得ない、社会的な不条理や混沌が存在する。これらは両者とも、何かしらの社会や国家構想を軸に、それらが創作された時代や場所における「問題」を提示しているのである。

フェルナンデス・フローレスは、『七つの柱』において無欲の「ユートピア」を描き、近代社会がかつての宗教的美徳を失い、その代わりに罪に基づいた価値のうえに成立していることを証明した。このように、宗教的規範からもたらされる罪源に基づいて実際の社会に対して批判を行い、教示を与えるという点においては、まさにモアの『ユートピア』と類似している⁹²⁾。

91) Herman Northrop Frye. 1965. Varieties of Literary Utopias. In *Utopias and Utopian Thought*, edited by Frank E. Manuel, pp. 25-49. Boston: Beacon Press, p. 27.

92) 澤田昭夫によると、モアの『ユートピア』は、エンクロージュアを含めたとす

しかし、彼はそれと同時に、かつての中世的宗教観にとっては崇高なものであった世界像が、近代化を迎えた人びとの前では無力であることを認めていた。彼の掲げた「ユートピア」は、当時の近代社会を生きる人びとにとっては、抑圧的な世界像としての「ディストピア」でしかなかったのである。よって、彼はかつての宗教的価値に基づいたユートピアの敗北を当作品の最後で描いたのである。

1926年にこのような保守的ユートピアの敗北を掲げた作品が現われたわけだが、アメリカの社会学者であったジョイス・ハーツラー (Joyce Oramel Hertzler: 1895-1975) は、1923年の時点でかつての伝統に則った正統的ユートピアは敗北し、これからは新たなユートピアが黎明を迎えることとなったことを次のように述べている。

歴史に関する学説の進展、発展や進歩を巡る思想的成長によって、本来のユートピアは消えてしまいました。これも、今日の人びとが社会的成長や発展といった概念を持つようになり、完璧な代替物を描くことよりも、現在の社会への改善を行なう必要性に迫られているからです。近頃、我々の進化に関する思想によって、私たちは依然と同じ理想主義 (idealism) を抱きながらも、それらは以前のような非現実的な形象を留めてはおりません。なぜなら、例えそのような究極的目標が未だに見通しのつかないものであっても、私たちはいつかそのような改善が成されることを感じるころまで来ているからです。⁹³⁾

彼が主張しているように、20世紀前半期におけるユートピアをめぐる議論において、保守的ユートピアは革新的ユートピアに席を譲ることと

べての社会問題を貪欲 *avariti*、怠惰 *acedia*、高慢 *superbia* などという罪の結果だとしてその非道徳性、罪悪性を糾弾し、それらの罪に駆られて私利追求にあけくれする現実のキリスト者よりもはるかに有徳、幸福で真にキリスト教的生活を営む共栄追求のユートピア人を实例に、大度 *largitas*、勤勉 *occupatio*、謙遜 *humilitas* の生活をキリスト教社会のひとびとに勧めている」。(澤田昭夫「歴史と文学と社会——文学作品としての『ユートピア』の歴史的解釈について」澤田昭夫 監修『ユートピア』——歴史・文学・社会思想』荒竹出版株式会社、昭和59年、80-81頁。)

93) Joyce Oramel Hertzler. 1965. *The History of Utopian Thought*. New York: Cooper Square Publishers, Inc. p. 225.

なった。そして、そのような傾向に対する反動派として、フェルナンデス・フローレスをユートピアの系譜上に位置づけることができるだろう。

上記で述べたように、かつての普遍的価値または規範に則ったユートピアは、20世紀を通して、少なくとも表舞台からは消えてしまったように見える。しかし、だからといって、そのような保守的指針によって社会における「正しさ」を取り戻そうとする潮流が完全に途絶えたわけではない。今後は、「保守的ユートピア」の現代への影響とその変貌について考察していきたい。

